被服構成実習授業の取り組みについて一考察
ー ファッションショー作品からみる ー

小　川　秀　子

Discussion about the approaches to the practical training of dress construction
ー from a perspective of works of fashion show ー

Hideko Ogawa

1　はじめに

本学は開学以来２度の改組を経て、平成16年より人間総合学科としてスタートしている。人間総合コースとして組まれた教育課程表には開講科目が230ほどあり、学生は自らの興味、目的に合わせて、自由なカリキュラムのもとで学んでいる。

本学科、ファッション・インテリアコースのなかで、筆者が担当している２年次、前期「アパレルデザイン実習Ⅰ」・後期「アパレルデザイン実習Ⅱ」の被服実習授業では、学びの集大成として、これまで７回のファッションショーを行ってきた。

選択科目として開講している科目のため、履修生は毎年変動する。ファッション・インテリアコースの中で、ファッションに興味があり、服を作ることが好きな学生が、先輩の発表したファッションショーを見て、自らもやりたいと履修する学生も見られる。

そこで、本稿では本学に入学する前に経験した被服構成実習の実態を探り、教科発表を通して学び得たことについて、若干の結果を得ることができたので報告する。

さらに、2007年度から2011年度にかけて、学生が製作したデザインドレスの作品から24点を取り上げ、被服構成実習授業における教育的効果について解説する。

2　実習授業の取り組み

小・中・高等学校の学習指導要領の改正に伴い、家庭科の中で被服に関する授業は激減している。ここでは、本学に入学する前に受けた被服教育の実態を知るために、「アパレルデザイン実習Ⅰ・Ⅱ」を履修した20名の学生を対象にして、表１に示す項目を調査した。

小学校で製作したものとして、エプロン、ナップサック、クッション、フェルト小物など、小物製作が100％であった。

中学校では、衣服の製作として10％の学生が経験ありと答え、ハーフパンツを挙げていた。その他、95％の学生がエプロン、ぬいぐるみ、巾着、マフラー、フェルト絵本などの小物製作を経験している。

高等学校を図１で示すが、衣服製作の経験がある学生は35％見られ、全体の７割近い学生が経験なしと答えている。

高等学校の学科別を図２で見ると、履修生の半数以上の55％が普通科出身であり、商業科、総合ビジネス科が、それぞれに５％ずつ見られ、全体の65％が普通科、商業科、総合ビジネス科などを修了した学生であった。

図３で示すが、普通科、商業科、総合ビジネス科の中で見ると、衣服製作の経験について31％があると答えている。製作した内容は、ハーフパンツ、エプロン、体育祭の衣装、服のリメイクなどを挙げていた。小物製作では、巾着、テッシュケース、マフラー、トートバッグ、指人形などが見られた。3割の学生が被服の経験があると答えているが、この場合、中学校で製作した教材と変わらず、衣服としてはハーフパンツだけであった。

次に、図４で示すが、総合学科、生活服飾科、生活文化科等を終了した35％の学生を見ると、被服製作実習の経験があると86％が答えている。

経験がある場合、衣服製作の内容は、エプロン、シャツブラウス、ジャケット、スカート、ハーフパンツ、ウェディング・ドレス、甚平、ゆかた、ウールの長着等を挙げていた。実習内容が突出しているのは、生活服飾科で専門的に学んだ５％の学生によるもので、洋服の他に和服製作も含まれていた。小物製作として、巾着、トートバッグなどが挙げられている。

図５では、モノを作ることに興味をもちはじめた年齢を聞いている。小学校の頃からが50％、次に幼稚園や保育園など幼少の頃が25％、中学校の頃が20％と続いている。

図６では、家族からの影響はあったかについては、母親から影響を受けたが41％といちばん多く見られ、次に31％が祖母と答えている。学生の７割以上が家庭環境によりモノを作ることに興味をもつきっかけになったと答えている。

学生の記述を見ると

１　母や祖母が裁縫が得意であった。
２　裁縫をしている母や祖母のかたわらで布のはし切れなどで一緒に小物を作っていた。
３　母や祖母がモノを作る姿をつねに眺めていた。
４　手作りの洋服やマフラーを作ってもらい、とてもうれしかった。

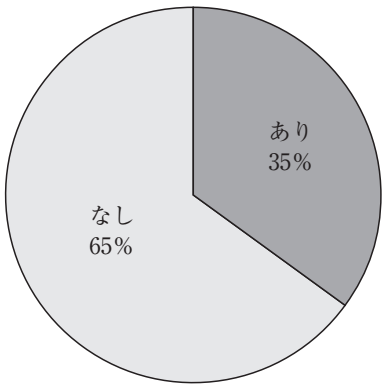

図１　衣服製作割合（全体）

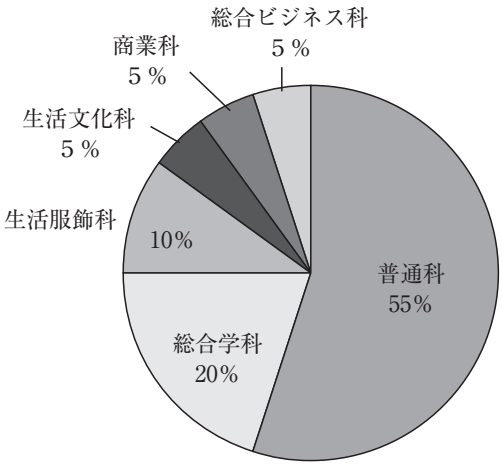

図２　高校出身科

表　1

1　被服構成の経験について述べてください。

①　小学校時代に製作した作品

小物製作

衣服製作

②　中学校時代に製作した作品

小物製作

衣服製作

③　高校時代に製作した作品

小物製作

衣服製作

2　何歳ころから、物をつくることに興味を持ちましたか。

3　家族からの影響はありましたか。

4　出身高等学校は何科でしたか。

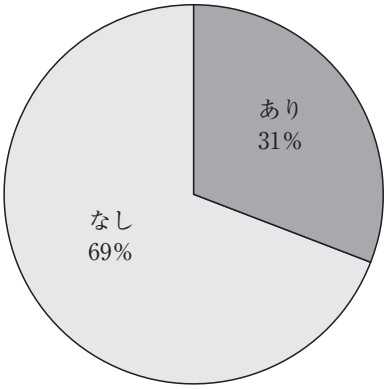

図３　衣服製作割合（普通科・商業科・総合ビジネス科）

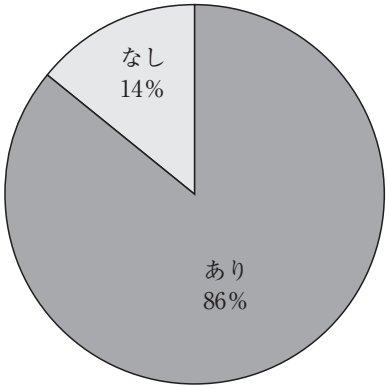

図４　衣服製作割合（総合学科・生活服飾科・生活文化科）

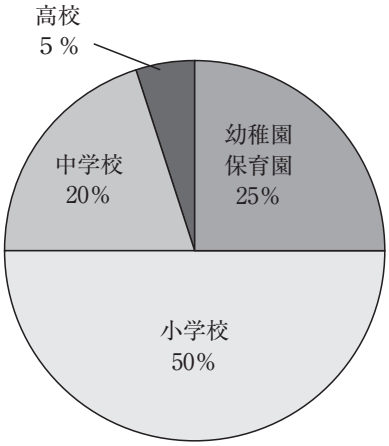

図５　興味を持った年齢

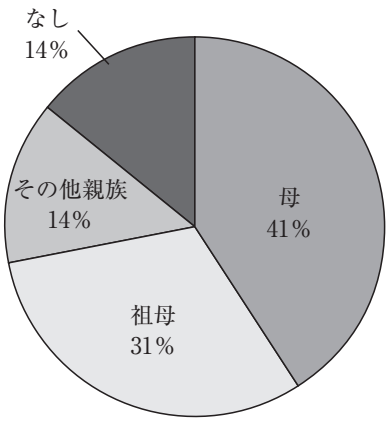

図６　家族からの影響

３　作品製作指導の工夫と実態

図１でも示したが、履修生の７割近い学生が入学前までに被服構成の経験をほとんどもたず、筆者が担当している実習授業を履修してくる。

この科目では、シラバス上の授業計画として、ウェディング・ドレスを課題作品としている。しかし、毎年、学生が望む教科発表を実現させるためには、デザインドレスの製作が必要不可欠となる。学生が２～３点の作品を製作するためには、正規の授業数をはるかに超える、課外時間と夏季休業中の時間を最大限に有効活用することで、漸く完成に至っている。

ゆとり教育のなかで育ってきた学生たちの技の未熟さは、年々著しく低下し苦慮するばかりである。調査で見られるように、実習経験が全くないに等しい学生に対して、限られた時間のなかで、満足のゆく授業を行うことは至難の業である。

一人ひとりの個性を引き出し、学生自らの手で実現可能な作品を作らせるために、試行錯誤を繰り返し、毎年授業を創り上げている。

３－１　2007年から2010年度にかけて発表した作品の解説　　写真No.13～No.24

No.13

ハイウエストにデザインした２点のドレスは、白と黒のシフォンをたっぷりもちいた。スカートはバルーンにデザインして変化をもたせている。ドレスに薔薇をイメージした大きなモチーフをつけることで、インパクトあるモノトーンのドレスになった。

No.14

ベージュと黒の色違いの布地をベースにして、民族調の絵柄を毛糸で刺繍した素朴な味をもつ布地をもちいて製作した２点は、エスニックをテーマにデザインしている。遊び心いっぱいの作品になった。

No.15

大きな花柄と無地の布地をもちいて、ジャケットとスカートのツーピースにデザインしている。お洒落感を増すための手法として、前スカートの左右面にジャケットの布地から切り取った花をパッチワークしている。細かい手技の込んだ作品に仕上がっている。

No.16

無地の別珍地を共通にして、花柄の異なる縮緬地をつかいデザインしている。左側のドレスは12枚はぎのティアードスカートにデザインしている。スカートをミニ丈にすることで、可愛らしさを表現した。右側のワンショルダーのドレスは、スカートサイドに深くスリットを入れ、エレガントさを強調している。ジャポニズムをテーマにしているが、全く異なるふたつのデザインにつくり上げている。

No.17

シルバーとゴールドのラメシャーをハイウエストのトップスにもちいてデザインしている。ドレスのスカート部分は、柔らかいシフォンをたっぷり使っている。アシンメトリーにデザインしたスカートサイドには、幾種類ものコットンレースをデコルテすることで、個性的なドレスをさらに面白く表現している。

No.18

ゴールドとシルバーのメタルフロックスパンをもちいて、アシンメトリーにデザインしている。テーマはアバンギャルド。布地自体の面白さをそのままにして、学生の体型を最大限に生かすために、ボ

過年度生　作　品（2007年度～2010年度）

No.13

No.14

No.15

No.16

No.17

No.18

No.19

No.20

No.21

No.22

No.23

No.24

2007年度作品　No.13～No.15
2008年度作品　No.16・No.17
2009年度作品　No.18～No.21
2010年度作品　No.22～No.24

表２　生地の名称と組成繊維

ドレスNo.	生地の名称	組成繊維
No.1	シフォンプリント シフォン	ポリエステル　100% ポリエステル　100%
No.2	オーガンジープリント サテン	ポリエステル　100% ポリエステル　100%
No.3	インド綿パッチワーク	綿　100%
No.4	不明 ポリデジン	不明 ポリエステル　100%
No.5	シフォン 裏地	ポリエステル　100% ポリエステル　100%
No.6	ツイード 裏地	ウール　75%・ポリエステル　10%・ ナイロン　10%・アクリル　5% ポリエステル　100%
No.7	イタリアンツイード フェイクファー 裏地	ウール・ポリエステル・レーヨン・アセテート・綿 表 アクリル　100%　裏 ポリエステル　100% ポリエステル　100%
No.8	ラメニット フェイクレザー ソフトチュール 裏地	ポリエステル　100% 表 ポリウレタン　100%　裏 ポリエステル　100% ナイロン　100% ポリエステル　100%
No.9	チュールスパングル エメラルド ソフトチュール	ポリエステル　100% ポリエステル　100% ナイロン　100%
No.10	ツインクルサテン オーガンジー	ポリエステル　100% ポリエステル　100%
No.11	ダマスクタフタ	ポリエステル　100%
No.12	不明 チュールレース	ポリエステル　100% ポリエステル　100%　刺繍レーヨン　100%
No.13	シフォンジョーゼット ポリエステルオーガンジー 裏地	ポリエステル　100% ポリエステル　100% ポリエステル　100%
No.14	不明 フェイクレザー	不明 表 ポリウレタン　100%　裏 ポリエステル　100%
No.15	不明 ソフトメルトン	ウール　100% ウール　100%
No.16	別珍 縮緬	綿　100% ポリエステル　100%
No.17	ラメシャー シフォンジョーゼット 不明 レース 裏地	ポリエステル　100% ポリエステル　100% 麻　100% 綿　100% ポリエステル　100%
No.18	メタルフロックスパン ソフトチュール	不明 ナイロン　100%
No.19	ツイード ウールツイード 裏地	綿　42%・レーヨン　25%・ナイロン　18%・ ポリエステル　15% 不明 ポリエステル　100%
No.20	縮緬 縮緬	ポリエステル　100% ポリエステル　100%
No.21	オーガンジープリント ポリエステルサテン	ポリエステル　100% ポリエステル　100%
No.22	アップリケレース サテン タフタ 裏地	ポリエステル　100% ポリエステル　100% ポリエステル　100% ポリエステル　100%
No.23	オーガンジープリント サテン	ポリエステル　100% ポリエステル　100%
No.24	フェイクレザー ラメラッセル	表 ポリウレタン　100%　裏 ポリエステル　100% ナイロン　50%・メタル　40%

ディコンシャスのシルエットにデザインしている。

No.19

淡いピンクとグレーのツイード地をつかい、シャネル風のスーツにデザインした。エレガントをテーマにしているが、スーツと共布の帽子をつけることで、大人の可愛さを表現した作品になっている。

No.20

着物から発想してデザインをおこしたドレス。花柄と無地の縮緬をもちいて、左右不対象の2点のドレスにしている。アシンメトリーにデザインしたワンショルダーのえり肩あきと、ふり袖をイメージした袖口に、無地の縮緬を縁取りすることで、デザイン効果を増した作品になった。

No.21

オレンジとイエローのオーガンジープリントをもちいてデザインしたドレス。同じデザインで共通性をもたせている。

No.22

ピンクのアップリケレースを共通にしたドレス２点。右のドレスはアップリケレースだけをもちいてストレートラインにデザインした。左のドレスはトップスだけレースをもちいて、スカートは張り感のあるタフタ地でバルーンにデザインしている。異なるデザインで変化をもたせた。

No.23

No.24と同じデザインであるが、布地の特性が異なるオーガンジープリントをもちいたことで、ドレスの表情がNo.24と全く異なった、エレガントなドレスになっている。

No.24

アバンギャルドをイメージしたドレス２点は、色違いのフェークレザーをアシンメトリーにデザインしている。布地の特性を生かして、ドレスのサイドにギャザーをドレープ風に入れた左右不対象の２点のドレスは、大胆なボディコンシャスのシルエットに表現している。

デザインと素材を統一することのメリット

・ショーのグループ分け容易であり、統一感が出せる
・デザインを同じにすることで、同じパターンを使用することが可能になる
・同じ生地であっても、色・柄を変えることで表情が違う感じを表現できる
・左右不対象のデザインにすることで面白さを表現できる

３－２　2011年度に製作した作品の解説　写真No.１～No.12

No.１

ペールトーンのイエロー、パープル、ピンクの３色の楊柳シフォンプリントをもちいている。シンメトリーとアシンメトリーにデザインしたドレスのトップスは、シフォンの柔らかさを生かしてドレープをほどこしている。ハイウエストから流れるスカートは、ギャザー・フレアーをたっぷり入れている。ドレスのポイントになる袖は、花柄と無地のシフォンで花びらをつくり、幾重にも重ね合わせてつくられている。

No.２

３種類のプリントオーガンジーをもちいて、デザインを同じにした作品。ドレスを着用する学生の個性に合わせたカラーを選ぶことで、ドレスがさらに華やかなものになっている。

2011年度 作 品

No. 1

No. 2

No. 3

No. 4

No. 5

No. 6

No. 7

No. 8

No. 9

No.10

No.11

No.12

No.３

インド綿のパッチワークの布地を３種類もちいて、デザインを同じにした作品。ヨーロッパの田舎娘をイメージして、布地全体に施されたパッチワークを生かしたデザインにしている。

No.４

赤と黒のチュール地に花のモチーフがついた布地をもちいて、デザインは同じにした作品。布地のもつ面白さを生かすために、あえてデザインはシンプルにし、シルエットはＡラインにしたドレス２点。

No.５

色違いのシフォンをもちいて、デザインを同じにした作品。ハイウエストのトップスは、シフォの柔らかさを生かして、細かいドレープを入れている。スカートはストライプの柄をバイヤス方向でデザインすることで、躍動感のあるドレスになっている。

No.６

色違いのグレンチェックのツイード地をもちいて、デザインを同じにした作品。テーラードカラーのコートドレス２点は、定番のシンプルなデザインであるが、丁寧に仕上げたことで存在感のある作品になった。

No.７

イタリアンツイードとフェイクファーを共通にもちいて、デザインを異にしたドレス２点。右のワンピースはシンプルなＡラインにしているが、黒のフェイクファーでスペア・カラーをつくり、可愛さを表現している。左のワンピースはローウエストにデザインしているが、黒の袖とアクセサリーをポイントにして、右のワンピースと共通性を表現している

No.８　アバンギャルド

黒のラメニット、フェークレザー、ソフトチュールの３種類の布地をつかい、デザインを異にしたドレス２点。ラメニットとフェークレザーは、伸縮性、ドレープ性、ギャザー性に優れているため、布地の特性を最大限に生かしてデザインしている。

No.９

チュールスパングルを共通につかい、デザインを異にした作品。黒のチュール地にゴールドと深紅のスパングルで大きな花が施されたもの。オートクチュールのドレス地につかわれる高級感あふれる生地を生かしデザインした作品である。

No.10

色違いの光沢のあるツインクルサテンを共通にして、デザインを異にした２点のドレス。着用者の個性と体型をそれぞれに生かしてデザインした作品である。

No.11

色違いのフロック加工が施されたタフタ地をもちいて、デザインを同じにした２点のドレス。ドレスの生地は輸入カーテン地を使用している。クラシカルなイメージをもつ生地であるが、スカートをミニ丈のバルーンにデザインすることで、可愛さを表現している。ウエスト部分には、硬くきっちりと組まれたカーテン留めのタッセルをつけることで、ドレスのポイントとして効果的なものになっている。

No.12

18世紀のドレスをイメージしてデザインした２点のドレスは、No.11と同じく輸入カーテン地をもちいている。クラシカルなドレスを表現するために、スカート丈はロング丈にして、ウエストやネックラインにクリスタルのブレードをつけ、重厚な豪華さを表現したドレスにしている。

毎年、ファッションショーを企画発表するには、60～70点ほどの作品が必要となる。限られた時間内

に作品を製作するための手段として、①～③のグループ分けをして、作品の統一を図り指導している。

グループ分けすることで、発表するシーンに統一感が生まれる

① 同一の素材をつかい、デザインを異にする
写真 №1・No.12

② 色柄の違う同一の素材をつかい、デザインも同一にする
写真 No.2・No.3・No.4・No.5・No.6・No.11

③ 同一の素材を共通につかい、デザインを異にする
写真 No.7・No.8・No.9・No.10

4 ファッションショーを通して学生が学び得たこと

ファッションショー終了後、課題として記述させている感想文から、2011年度の履修生20名から一部であるが実際のコメントを紹介する。

学生1

以前から縫うことは好きでしたが、教科発表を終えてもっと好きになりました。

辛いことがあっても自分の好きなことなので、苦痛だと感じることなく楽しく製作することができました。気持ちの持ちようで変わるんだなということ、どんなに大変でも諦めずに最後までやり遂げることの大切さを学びました。

学生2

今まで、出来ないと思っていたこと、やろうとすら思わなかったことがたくさんありました。しかし、教科発表を終えて、人はやればできる。ということを学びました。簡単に「やればできる」などと言う人もいますが、本当に頑張って成し遂げたことがあるから、この言葉を口に出来るのだと思いました。これからの人生でなにか困難なことがあったとしても、この経験を活かして何事も諦めずに取り組んでいきたいと思います。

学生3

以前から、ファッションや洋服は好きでしたが、教科発表を通してさらに好きになりました。

作品製作を通して、デザインした人や作った人の気持ちが込められていることに気づき、洋服を見る目が変わりました。

以前は集中力がないと思っていましたが、自分がこれだけ集中して何か出来るのだということに気づき、教科発表に関する全ての経験から自信をつけることができました。

学生4

物事を以前より前向きにとらえることができるようになりました。製作過程を経て限られた時間の中で、最後まで諦めず努力することの大切さを学びました。このことを活かし、これからは自分が後悔しないように、何事も積極的に取り組んでいきたいと思います。

学生5

何事も挑戦することが大切だと思いました。最初から出来ないと思うことでも、やってみなければ分からないし、やろうとする、挑戦する気持ちが大切だと思いました。

ファッションショーを経験して、人前に立つ度胸がつきました。

学生６

以前は団体行動が苦手で、人と深くかかわらないでいましたが、教科発表を経て人と関わることが好きになりました。今まであまり関わらなかった友達と関わることで、前の自分より明るくなれた気がします。

学生７

１年生のころは、ミシンの扱いや手縫いもおぼつかなく、自分には向いていないのでは思っていました。２年生になり、自分が作りたい物を作っているからなのか、製作意欲が湧き、物を作ることが大好きになっていました。

また、短い製作時間の中で時間を上手く組み立てることができるようになりました。

人前で何かするのが大の苦手でしたが、教科発表までの様々な経験を通して、自分が苦手だと思っていることでも、意識することで変われるのだと気づき自信につながりました。

学生８

不器用で、最初は自信がなく、人より時間がかかったため、おろおろばかりしていました。しかし、一生懸命努力して頑張ればやり通すことができることが分かりました。また舞台に立ったことにより、度胸がつきました。頑張れたことで踏ん張る力が付きました。

学生９

以前の自分は、何か困難にぶつかったり、辛くなった時、一人で抱え込んでいましたが、作品製作の過程が自分と向き合う時間となりました。また先生や仲間との色々な会話から、物事をポジティブに捉え、前向きに考えるようになりました。素直な気持ちを言い合える仲間と、心から信頼できる先生に出会えたことに感謝し、これからも大切にしていきたいです。

５　まとめ

短期大学部における２年間の学びは、余りにも短く足早に過ぎていく。限られた貴重な時間をどのように過ごすかは、学生それぞれに大きな違いがある。平等に与えられた２年間は同じ時間であるが、この授業を履修した学生たちは、就職活動と課題作品製作の両立を図りながら、自己目標に向けて努力してきた。教科発表に到達するまでの数ヶ月間の工程は、想像をはるかに超える過酷なものであったと思える。

教員として、学生それぞれの潜在能力を最大限に引き出し、思い描く作品を完成させるまでの苦労は計り知れない。しかし、出来上がった作品を身につけた瞬間、達成感に満ち溢れた喜びの笑顔を学生のなかに見たとき、この授業の使命感を改めて強く感じる。

これまでの縫製経験からくる技術面での不安を取り除き、不可能を可能にする指導を行うこと、実践教育のありかたを今後も引き続き研究し深めていきたいと考えている。

参考文献

１　小川秀子「人間総合学科の特色を生かした授業の取り組みについて一考察」新潟青陵大学短期大学部研究報告　第37号　2007　pp.25～35

２　小川秀子「ウェディング・ドレスの嗜好性について一考察」新潟青陵大学短期大学部研究報告　第41号　2011　pp.33～51